

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520356

研究課題名(和文)ベルギーの芸術活動における多層的ナショナリズムと国際性

研究課題名(英文)Multilayered Nationalism and Internationalism in Artistic Activities of Belgium

研究代表者

岩本 和子 (IWAMOTO, Kazuko)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60203410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：多言語・多文化国家ベルギーの芸術活動と国家/地域/都市レベル、仏・蘭・独の言語地域横断的な<多層的ナショナリズム>との関係、それらの周縁性や前衛性にも起因する国際性について明らかにすることをめざした。具体的にはベルギーの現代作家を主な対象として、神話・伝説・19世紀以来の国民的文学との比較・検討を行った。またベルギー各都市、フランスやケベックの芸術活動について調査、比較検討した。多文化共生(芸術家個人の内面的多層性も含む)や伝統と前衛、ナショナリズムと国際性の意味を問い直しつつ、ベルギー芸術のアイデンティティを探り、それらの成果をまとめた。

研究成果の概要(英文)：We aimed to study about artistic activities in Belgium which is a multilingual and multicultural country, about their <multilayered nationalism> of state/regions/cities level or of trans-linguistic level (French, Dutch and German) and about the internationalism resulted from their peripheral and at the same time avant-garde position. We studied especially Belgian contemporary literature by analyzing some texts and comparing them with mythologies, legends and "national literature" of the 19th century. We also did the research about artistic activities of different Belgian cities, France and Quebec to compare the situations in francophone countries. With these studies, we tried to consider the identity of Belgian arts from the point of views of multicultural coexistence (including the artist's personal multicultural situation), of tradition/avant-garde and of the nationalism/internationalism. We organized the results into papers.

研究分野：人文学

キーワード：ベルギー文学 フランス語圏文学 多層的ナショナリズム 多言語・多文化 文化の中心と周縁

1. 研究開始当初の背景

(1) ベルギーは、小国ながら多言語・多文化共存のモデルと見なされている。しかし1830年の独立以来、フランス語圏/オランダ語圏、ワロン/フランデレン地域・民族の間での「言語戦争」と共に政治体制も芸術文化活動も歩んできた。申請者はヨーロッパの仏語圏地域研究、特に上記のような多言語・多文化が共存するベルギー文化の「中心」「周縁」概念とアイデンティティ確立の問題についての考察を課題として、19世紀から現在に至る芸術・文化の諸相の研究を続けてきた。

(2) ベルギー芸術文化研究を進める中で2008年に「関西ベルギー研究会」を立ち上げ、文学、言語、メディア、美術、建築、歴史、政治、経済など多領域の専門家たちと学際的研究を積み重ねてきた。またその研究活動の一環として「現代ベルギー文学」翻訳出版企画も出てきた。申請者が中心となって重要な現代作家(20世紀、特に戦後生まれの現役作家)を選び実際にテキスト分析や作家研究を進める中で、国家/地域/都市レベル、仏・蘭・独の言語横断性、ラテン/ゲルマンを横断する精神性などの<多層的ナショナリズム>について、改めてその諸相を分析し解明する必要性を感じた。また個々の作家の特異性、彼らをつなぐ仮に「ベルギー性」とでも呼んでおく共通の性質、中心(フランス)と差異化すべき周縁性や前衛性、外へと開かれた(仮に呼んでおく)「国際性」についても作品やさらに作家の領域横断的な芸術活動を通して具体的に追求しておく必要もあると考えた。

(3) 近年、「ベルギー文学」をタイトルに掲げる、ベルギー人執筆者(仏・蘭語とも)による文学史・芸術関係研究書が相次いで出版されている。しかしその際の「ベルギー文学」の範囲はいまだに曖昧で、フランス語/オランダ語で書いた作家はすべて(外国人や移民も)含めるのか、パリで出版した作品の帰属性をどう捉えるかなど、枠は揺らぎ続けている。地域や民族主義に関する著書出版も増え、かつての「国民文学」(19世紀のド・コステルやメーテルリンク、ローデンバックなど)の新版や研究書も増えてきている。これらの現象も踏まえ、外からの客観的な目でもとらえ直すことにも意義があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 以上の認識や研究の必要性から、本申請による研究では、ベルギーの現代作家を主な対象として、ベルギーの神話・伝説・19世紀以来の国民的文学との比較・検討を行う。また作家の領域横断的な芸術活動にも芸術環境・芸術政策の現状を踏まえつつ注目し、多文化共生(芸術家個人の内面的多層性も含む)や伝統と前衛、ナショナリズムと国際性の意味を問い直すことを目指す。

(2) そのために、

作家のテキストにおける多層的ナショナリズムと前衛的な側面に注目しつつ調査・分析する。具体的には、民族・言語・帰属性や「ベルギー」の問題を強く意識し、あるいは多国籍的、無国籍的に国境を越えて活躍し、多方面で芸術活動を担っているベルギー現代作家を何人か取り上げ、作品分析を通して各作家におけるアイデンティティの問題を考察する。

それを踏まえて、映画やパフォーマンスアートなどとの関わりや作家自身の領域横断的活動を通して、芸術活動の実践や姿勢を追求していきたい。具体的な分析対象としては、ヒューホ・クラウス、マドレーヌ・ブルドゥクスなどの現代作家、また戯曲への翻案、舞台上演、映画化作品との比較や、「ベルギー性」の検討と合わせて、作家たちを有機的かつ多層性のもとにつなぎ合わせる。

最終的には、多文化共生(芸術家個人の内面的多層性も含む)や伝統と前衛、ナショナリズムと国際性の意味を問い直すことを目指す。現役で活躍中の作家が多いため、申請者がすでに作ってきた芸術家、大学関係者、文化省や芸術諸団体とのつながりを通して、作家へのインタビューや討論会などもできると考えている。関連する映画や舞台などのパフォーマンス活動や文化施設などの実地調査も合わせて行うつもりである。

以上の研究を踏まえつつ、現代のベルギー人作家たちの日本への紹介、作品に現れた「日本」の分析や影響関係の検討、共同の芸術実践活動の紹介なども補足的に行うことになる。研究成果を論文公刊や現代作家邦訳出版などの形で公にし、日本において未だマイナーな「ベルギー文化」研究推進を目指す。

3. 研究の方法

(1) ベルギーの重要な現代作家数名を中心に、具体的な言語作品の分析や関連文献の調査・分析を行う。仏語文献が中心資料となるが、仏語訳文献や研究者・翻訳家の協力も得ながらオランダ語圏作家も対象とする。具体的には、

ベルギーの言語・民族・多文化状況に関する文献、文学・芸術文化関係の文献、各都市の歴史や現状についての文献、フランスを中心としてヨーロッパ各国の関連する文学・芸術作品に関する文献を収集する。

国内でも数少ないながらベルギーをフィールドとする文学、言語、美術、舞台芸術、メディア、歴史学などの研究者がいる。それらの人たちと意見交換、共同研究会、シンポジウムなどを行ない、情報交換を図る。

(2) ベルギーや欧州の神話・伝説・過去の文学との比較検討、他の芸術ジャンル(舞台芸術、映画など)との比較や作家自身の芸術実践活動にも目を向け、民族・「ベルギー性」や前衛性・国際性について考察する。具体的

には、

すでに交流のあるブリュッセル自由大学、ルーヴァン・カトリック大学、リエージュ大学などの研究者と意見交換を行う。ブリュッセルの「神戸大学ブリュッセルオフィス」も利用して共同研究会かセミナーを行ない、研究の推進を図る。大学図書館、ベルギー王立図書館などで本研究に関する文献収集を行う。また作家（その親族）への直接インタビューを行う。作家の地域アイデンティティに関わるブリュッセルやワロニー、フランデレンの映画や舞台などのパフォーミング活動や文化施設などの実地調査も行う。

調査。分析対象の作家としては例として以下を予定する。

ヒューホ・クラウス(1929-2008)：ブルッヘ生まれでオランダ語圏フランデレンを代表する詩人、小説家、演劇人（戯曲作家、演出家）、映画人（シナリオ、演出家）、画家（前衛グループ COBRA に参加）である。作品は常に民族、言語、帰属性や「ベルギー」の問題を鋭く突きつけるもので、多角的研究と日本への紹介は急務のものと思う。マドレーヌ・ブールドゥクス：(1906-1996) リエージュ生まれ、ブリュッセル自由大学で哲学専攻、ナチ支配下では自由フランスに逃れてレジスタンス運動をしつつ、小説執筆。サルトルやボーヴォワールに認められ、*Le Temps* 誌などに小説を発表した。作品は少ないが家庭の主婦が日常の事物や家事の中で自由・解放を求めるテーマが多く、不倫や嫉妬、衝撃的な結末などを伴う。最近その独特な文体やジェンダー批評においてフランスやベルギーでは再評価されつつある。

アメリー・ノトン(1967-)：パリの大手出版社アルバン・ミシェルから出版し、フランスのメディアに頻繁に出るが、ベルギー人でありむしろ無国籍的アイデンティティがあると思われる。

ジャン＝フィリップ・トゥーサン(1957-)：小説作品の殆どが邦訳されていて、特権的に日本でも知名度の高いフランス語作家だが、テキストの合間に見え隠れする「ベルギー性」や主人公「私」のアイデンティティなどについての言及や研究はなされていない。

(3) 国内外の研究者との意見交換や作家への直接インタビュー、ベルギー各地の芸術活動・環境に関する現地調査も行う。成果を研究会やシンポジウム、論文、報告書などで公表する。また研究会や翻訳企画ともリンクさせて論文集、ベルギー現代文学翻訳紹介の形で公開する。

4. 研究成果

(1) ベルギーの言語・民族・多文化状況や歴史に関する文献、文学・芸術関係の文献を

収集し、整理・検討した。

(2) 国内外のベルギーをフィールドとする文学、言語、美術、舞台芸術、メディア、歴史学などの研究者たちと意見交換、共同研究会、ワークショップを行なった：

ベルギー研究会を関西と東京、名古屋で1、2ヶ月に一回開催。ブリュッセルで毎年2月または3月に国際研究会を開催し、ヘント大学 講師や王立音楽院講師、在ベルギーの研究者たちと意見交換を行った。ルーヴァン・カトリック (KU Leuven) 大学のヴァンデ＝ワレ教授(ベルギー/日本交流史)やヴァノーヴェルベーク准教授(日本政治学)、ブリュッセル自由大学 (ULB)、ルーヴァン・カトリック大学 (UCL)、グルノーブル第3大学、リール第3大学の研究者らとワークショップや意見交換を行った。ベルギーおよびフランスにおいてフランス語圏の芸術文化環境(多層性、国際性)を調査、大学や各都市の芸術文化施設などで文献収集をした。

ケベックにおいてもフランス語圏周縁の芸術文化環境(多層性、国際性)を調査、大学などでの文献収集、モンレアル大学ケベック文学研究センター所長デュピュイ教授らと意見交換を行った。日本ケベック学会シンポジウム「ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会」の企画、コメンテーターを務めた。

リエージュ大学クリンケンベルグ名誉教授を招き、申請者の企画、司会で神戸大学にてフランス語圏周縁文学に関する講演会を開催、意見交換を行った。

大手前大学文化交流研究所主催のシンポジウム「日仏マンガの適応と浸透」にて講演し、ベルギーとフランスの BD 比較をしてベルギー芸術の特殊性を明らかにした。

(3) 研究成果を論文や共著(編集担当)として発表した。

ゲルマン地域に伝わる「ウーレンシュピーゲル伝説」に基づいた19世紀作家シャルル・ド・コステルの小説、さらに20世紀作家ヒューホ・クラウスによるオランダ語戯曲への翻案(ライデン大学の学生と上演、さらにその現代版でフランデレン民族主義を戯画化)について研究し論文を執筆した。現代ベルギー作家ブールドゥクスに関する論文を発表した。

ベルギー研究共著『ベルギーとは何か? アイデンティティの多層性』を出版した。それに続く共著『ベルギー研究2 ベルギーを視る』の企画、執筆、編集作業を進めた。

(4) 研究テーマに沿った共同研究を中心となって進め、その成果を次のような形で発表する予定である。

ベルギー現代短編小説の翻訳出版企画を中心に行なった。ベルギー文学の特異性をテーマとしてより鮮明にするために、出版社と

の相談の上、19世紀作家も含めた「ベルギー幻想文学」の短編翻訳集とし、執筆、編集作業を進めている。またベルギー現代作家（当初の研究計画で挙げながら本科研費による期間に研究をまとめられなかった2名の作家が対象となる予定である。それにより、作家への直接のインタビューや研究も行うことになる。）やベルギーの文学・芸術研究者との共著企画に向けて意見交換を始めた。

2016年に「日白修好150周年記念シンポジウム 学際的交流と<ベルギー学>構築をめざして」のテーマで日本ベルギー学会、ベルギー研究会共催によるシンポジウムを開催する企画を申請者がお越し、その準備として諸分野の中心的な研究者と「ベルギー学」構築へ向けての意見交換を行っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2件)

IWAMOTO, Kazuko, Pauline était-elle heureuse? – L'éducation de la femme idéal selon Stendhal, *L'Année stendhalienne*, 査読, No 14, 2015, 印刷中

岩本和子、マドレーヌ・ブールドゥクスと日常性の詩学、国際文化学研究（神戸大学国際文化学研究科紀要）査読無、第41号、2013、1-30

〔学会発表〕(計 6件)

岩本和子、『タンタン』と『アステリックス』の日仏受容、大手前大学 2014 年度文化交流研究所シンポ時生む、2014.11.23、大手前大学（兵庫県）

岩本和子、ローデンバックとブリュージュ、ベルギー研究会、2013.4.21、西宮市大学交流センター（兵庫県）

岩本和子、ウーレンシュピーゲルをめぐる<民族の記憶>、ベルギー研究会、2012.7.29、西宮市大学交流センター（兵庫県）

〔図書〕(計 3件)

岩本和子 他(石毛弓他編) 思文閣出版、日仏マンガの交流 ヒストリー・アダプテーション・クリエーション、2015、282

岩本和子 他(岩本和子、石部尚登編著)、松籟社、ベルギーとは何か? アイデンティティの多層性、2013、300(80-102)

岩本和子 他(ジュリー・ブロック代表) 国立高等研究所、受容から創造性へ 日本近現代文学におけるスタンダールの場合、2013、298(73-78)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 和子 (IWAMOTO, Kazuko)
神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授
研究者番号: 60203410

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: